The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	型友禅の展開 : 絹布友禅とモスリン友禅
Author(s)	平光, 睦子
Citation	デザイン理論. 2004, 44, p. 132-133
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/53133
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

型友禅の展開
── 絹布友禅とモスリン友禅 ──

平光睦子／大阪大学大学院文学研究科文化表現論専攻

型友禅とは型紙をつかって捺染する友禅技法であり，化学染料を糊に混入して染色することに特徴がある。明治期になってこの染法が発明されたことで，はじめて近代化学の成果が日本の模様染めに取り入れられることになり，また，友禅染めの量産化が可能になった。このことから，型友禅の発明は「友禅染めにおける産業革命」といわれることもある。

しかし，型友禅は西欧からもたらされた技法ではなかった。それは，手描きの友禅染めや型染めといった日本の模様染めの技法に，西欧から輸入された化学染料が結びついた結果誕生した。ある面から見れば近代化といえるが，機械による量産あるいは西欧からの本格的な技術移入という意味での近代化が日本の模様染めに到来するのは，大正期に機械捺染が行われるようになってからのことになる。

現在では，型友禅といえば主に縮緬を素材にした絹布友禅をさす。その伝統が脈々と受け継がれてきた友禅染めの歴史において，型友禅は近現代史のなかに収められ，伝統工芸の一部門として確かな地位を築いている。

明治10年代後半，絹布の型友禅とともにはじまったもう一つの型友禅にモスリン友禅がある。薄手の毛織物，モスリンに型紙をつかって模様染めを施したモスリン友禅は，明治・大正期の模様染めを語る上でもっとも一般的なもののひとつに数えられるが，今日ではほとんど見られなくなった。モスリン友禅は，型友禅から機械捺染へという模様染めにおける近代化の二つの段階を経て発展し，そのため，今日では工芸史というよりもむしろ工業史や産業史のなかで語られている。

絹布友禅とモスリン友禅，この二つの型友禅は現在では異なった文脈から捉えられることが多い。しかし，型友禅の開発の経緯を見ると，それらが互いに影響しあっていたことがわかる。では，絹布友禅とモスリン友禅はいつごろから分岐して各々の道をたどりはじめたのだろうか。またその分岐にはどのような理由があったのだろうか。これらの疑問を出発点に，本論では，絹布友禅とモスリン友禅という二つの型友禅の展開を検討することによって，日本の染織産業における近代化の様相を概観してみたい。

型友禅の近代性

型友禅では，同じ模様を何度でも染めることができる。現在では，型紙によってえられるこの量産という性質が型友禅のもっとも顕著な特性のひとつとされている。しかし型友禅の開発当初を顧みると，おそらく，その目的は化学染料をつかった模様染めにあったと思われる。そして，その過程において型紙が採用され工程の合理化がはかれたことで，それまでの手描き友禅に比べ生産効率が格段に向上することにもなったと考えられる。

型友禅のこの量産という特性は，染織産業全般における技術の近代化とあいまって，流行の制度化という次なる段階の近代化に結びつく。型友禅の技術は明治20年頃にほぼ完成に至り，明治30年頃には成熟期を迎える。そして，その頃になると模様に流行が現れはじめる。光琳模様，元禄模様，曲線・渦巻き模様，洋花模様といった模様が流行し，１年から５年という短いスパンで次々と移り変わっ

ていった。こうした流行は，まず意匠制作を図案家の自主的な創作活動の場としてとらえなおそうとする工芸界全般の潮流によってその土壌が準備されたといってよいであろう。さらにその上で，関連団体や業者などによる図案の懸賞募集や展覧会，図案家団体の活動，顧客の意識変化といった要因が複合的に作用しあうことによって成立していったと考えられる。ある程度制度化された比較的規模の大きな流行，このような流行が成立しはじめたことが，型友禅の量産という性質がもたらしたもっとも大きな変革とさえいえるのではないだろうか。

型友禅の限界 ── 手から機械へ

明治中期から後期にかけて，工芸と工業が分岐していく。しかし，依然として西欧への輸出は「美術工芸」の重要な課題でありつづけた。なかでも流行の推移がとくに激しい服飾品や染織品についてはすでにそれ以前から西欧の流行に対応する難しさが指摘されており，友禅染めの輸出も極わずかな量に限られていた。明治30年代以降国内需要の拡大に成功をおさめつつあった型友禅において，西欧への輸出という目的はその眼中から抜け落ちつつあったようにも思われる。しかし，結果的にこの輸出という目的を達成したのは，絹布の型友禅ではなく，それに追従する立場にあったモスリン友禅だった。

型友禅の発明以降，絹布の型友禅では，多くの画家たちの協力のもとで絵画的な模様がうみだされ，次いで図案家たちによって華やかな流行が形成されていった。それと同時に，その技術は多くの型紙を使う込み入った表現に向かって発展し，生産効率とは逆の方向性にある工芸的な要素を深めていく。このような絹布の型友禅の発達は，画家や図案家に加え職人や業者といった人材とその結びつきによって，明治期までに京都に培われきた美術工芸の伝統の上に推し進められていった。その伝統は絹布の型友禅の発展を方向付ける一方で，モスリン友禅に対するある種の蔑視の風潮をよぶことにもなった。この風潮に起因するモスリン友禅における模様の描き手不足という慢性的な問題は，その模様の発達に致命的な遅れをもたらし，モスリン友禅に絹布の型友禅の模様を模倣しそれに追従する立場を余儀なくさせることになる。

大正期になってモスリン友禅に機械化が波及するようになると，型友禅の近代的な側面ではなく，むしろ手作業による工芸的な側面に光があたるようになる。絹布の型友禅に倣って発展したモスリン友禅は，その多彩さだけではなく型合わせの精巧さや繊細な表現といった質の高さにおいても機械捺染を凌いでいた。そして，そのことが，モスリン友禅が海外への輸出を実現するきっかけをつくり，また機械化を遅らせる要因にもなった。

明治期以降，絹織物の機械化は比較的小規模なかたちで進められた。一方，モスリンの国内生産は，まず友禅加工の技術が次いで無地染めの技術が開発され最後に紡織の設備が整う，といったように，まるでその製造工程を遡るような道のりをたどる。このふたつの素材の歩みには，それぞれに，近代の日本の染織産業がおかれた状況を読み取ることができる。そして型友禅は，この二つの流れが交わっていたほんの短い期間だけ，活力をもった生きた技法であることができたのではないだろうか。